駅伝大会のオブジェとトロフィーの制作

芸術系　上浦　佑太

2017年から筑波大学体育系が主催する駅伝大会において本研究室の学生が毎年トロフィーやメダル等のデザインと制作を担当しており、私も監修として関わっている。それらのうち、本稿では工作部門の協力を得て制作した３つの作品について紹介する。

2017年は大会の象徴となるオブジェの制作依頼を受けた。このオブジェは、走り終えたランナーが身につけていたリボンを一本ずつ結びつけることによってカラフルな球体になってゆく仕掛けになっている。球体の形状は、中央の柱の上下両端に帯状のステンレス板をしならせながら数本はめ込むことによって表現している。中央の柱は長さや太さを指定して購入できる市販の製品である。この柱を垂直に固定することができる金属製の台座が必要になり、工作部門に制作を依頼した。柱の下端は雄ネジになっているため、台座にはこれにぴったり合う雌ネジの加工が必要である。さらに側面には文字の入ったプレートを固定する必要があったため、このための雌ネジもあけてもらった。いずれも位置・深さとも高い精度で加工してもらえたため、無事プラン通りのオブジェを制作することができた（図１）。

2018年は、駅伝優勝チームのメンバーそれぞれに一点ずつ贈られる副賞として計10点のトロフィーを制作した（図２）。工作部門には、台座用の部材制作を依頼した。作品の主体となる８枚の色付きアクリル板を固定するには台座内部に空間が必要であったため、この時は無垢材ではなくアルミ板で制作してもらった。台座を展開した形に切り抜いたアルミ板を、木片に当てがいながら力を加えて慎重に曲げることで、立体化することができる。アルミ板の表面には文字も彫刻してもらった。文字間の調整など、細かい見た目についても学生自身が自分の目で確認しながら微調整させてもらうことができ、納得のいく仕上がりになった。

2019年も駅伝優勝チームメンバーへの贈呈用に10個のトロフィーを制作した（図３）。アクリル板を層状に重ねてできるオブジェを上下から挟み込んで固定する構造のデザインを考え、上下の部材をアルミ無垢材で制作してもらった。中央のアクリル部分は重量があり、接着剤だけで金属に固定するのでは不安定である。そのため、台座となる下部の直方体には上面中央に雌ねじをあけてもらい、不透明の白いアクリル内部に隠れているボルトを締めて接合し、さらに接着剤も併用することで固定の強度を得た。台座には文字彫刻を依頼した（図４）。

2017年のオブジェ制作の際、作りたいものは明確だったものの図面の引き方や材料費・加工費の相場などを知らなかったため、こんな状態で制作を依頼しても良いものかと、やや不安もあった。しかし、現地では素材、形状、耐久性、予算など様々な角度から実現のための選択肢を提案していただき、本当に助かった。金属やガラスの加工が選択肢に入ることで造形表現の可能性は大きく広がる。外観に関わる部材の制作だけでなく、隠れたところに必要な細かい部品などもジャストサイズで依頼できるため、形の探究の自由度は飛躍的に上がる。本学に工作部門があることは芸術分野にとっても大きな財産である。

図１．第１回なないろ駅伝 大会シンボルオブジェ
海老原梓（当時博士前期課程芸術専攻１年生）作、
上浦監修
（2016.2.24@筑波大学陸上競技場、筑波大学体育系主催）

図２．第１回なないろスポーツフェスタ
なないろ駅伝優勝トロフィー
速水一樹（当時芸術専門学群３年生）作、上浦監修
（2017.7.2@つくば市洞峰公園、筑波大学体育系主催）

図３．第２回なないろスポーツフェスタ
なないろ駅伝優勝トロフィー
中山佳保子（当時芸術専門学群３年生）作、
上浦監修
（2019.3.17@つくば市洞峰公園、筑波大学体育系主催）

図４．アルミ台座表面への文字彫刻加工の様子